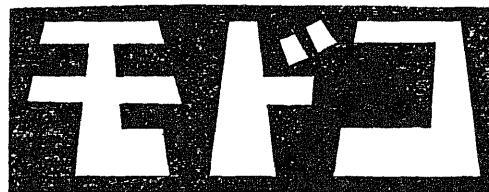


顧問高島平三郎先生



壹十五金六郵一
圓二十郵冊稅冊
拾月八稅分五拾
錢分錢共前厘錢

定價 敦面綺
一本日 育白麗

的いな 每月一回

行發社モドコ 七五町林區川石小市京東
三六九七二京東替振

小兒科專門

院長 医學士 石塚保吉

診療科目

小兒科一般、小兒健康診斷
營養法指導、乳母の検定

診察時間

宅 診 午前八時より 正午まで
往 診 午後七時より 十時まで
午後一時より 六時まで

入院應需

赤坂區青山南町三丁目(電車通り)

石塚小兒科醫院

電話 芝三四七四

家庭と幼稚園

—(教育上の協力者たる實を擧がよ)——

いろいろの意味に於て、幼稚園から家庭へ希望もし、勧誘もしたいことが澤山ある。其中主なることを二三述べて見度い。

(一) 幼稚園の教育は家庭の教育との協力事業であるといふことを忘れない様にして貰ひ度い。世間には其子供を幼稚園へ通はせるようになれば、其の子の教育一切を幼稚園として呉れるかの様に考へて居る家庭が無いでもない様である。それも幼稚園の教育力を非常に大きく見積つて居らるゝ者であるとも考へれば考へられる。けれどもそれは家庭の教育力を自ら餘り小さく見て居られると言ふことにもなる。殊に屢々耳にすることであるが、我家の子は幼稚園へ入れてあるのになつともよくならない、といふ類の訴へは、當然二人で

償ふべき責任を、自分の分は柵へ上げて對手ばかりを責めるといふ形がある。勿論幼稚園の方では、其の全責任を獨りで償ふ位の覺悟は有して居る。家庭の方からさういふ訴へを聞くことは、寧ろ良薬として甘受し、また或る程度まで深く恐縮するのである。決して、それを不快として返し言をいふのではない。しかし、それでは其の子供の爲に却つてよくないと思ふのである。殊に、こんな小言を幼稚園へ訴へる家庭の中には、幼稚園で折角苦心して與へて居る教育を、一日々々と家庭の方で破つてゆく様なのが事實上少くないのである。若しそんなことがあるならば、底なし鉤瓶で水を汲むと同じである。幼稚園の努力の無駄になるのも惜しい至りであると共に、子供こそ一番の損を

受けるのである。元來子供を幼稚園へ入れるのは、家庭が教育的に無能力なからではない、家庭は家庭として、その充分の教育力を發揮して居る上に尚ほ幼稚園の協力を得ようといふにある。私共では何も出来ません故、何分よろしくお任せすると

いふのは、一通りの世間挨拶としてなら兎に角く事實さういふ心持ならば飛んだ誤りである。學校とか幼稚園とかを、信頼するといふことは最も大切なことであるけれども、たより過ぎるといふことは當今家庭の通弊であるかも知れない。而して學校や家庭の教育が充分効果を發揮し得ない大きな理由の一つであるかも知れない。

(二) 幼稚園にたより過ぎ、任せ過ぎてはいけないといふのは、幼稚園の教育力を疑ひ悔つてよいといふこと、は大に違ふ。然るに、事實上、此の二つが奇怪な矛盾をなして居ることが尠くない。幼稚園にまかせ過ぎて居ながら、幼稚園を尊敬して居ないといふやうのことがそれである。何たる

甚しい矛盾なのであらう。何たる我まゝ勝手のことなのであらう。かういふ有様では愈々子供の教育は舉がらない。のみならず却つて害せられてゆく。

親達に幼稚園を尊重する心がなくて、何で子供の心に幼稚園を尊重せしめ得よう、幼稚園の不完全、保母の缺點などを子供の前で口外する如き心なしは論外であるが、大切な我子の教育の協力者として之れを心の底から尊敬するのではなくては駄目である。言ふまでもないことであるが、幼稚園は家庭の命を奉じて子供のお相手をして居る處ではない。保母の社會的位置は、素人目に高いものではない。中には隨分若い保母もある。しかし、我子の教育を托するに足りないと思ふのなら、始めから頼まない方がよいではないか。勿論社會的一般の問題としては、充分に尊敬を値せられない責が、或部分教育者の方にあると見なければならぬこともあるかも知れない。しかし、『我子の先

生』といふ關係は絶對の關係である。少くも我子にとつては絶對の關係である。結びつけるなら正當に結びつけなければならない。然らずんば早く關係を絶つた方がよい。

要するに、家庭は我子の教育の協力者たる幼稚園に對して全幅の敬意を有せなければならぬ。

(三)協力者であるからには、たゞ分擔して居るといふ丈けではない。すなはち兩方から互に注文が出なければならぬ。相談せられなければならぬ。さうして其の相談の結果が充分實行せらればならない。

幼稚園の方である所謂保護者會は、此の最もよい機會であるが、それが充分利用せられて居ない。第一、眞に相談甲斐のあるお母さんの出席が少ない。出席しても何一つしみぐとした相談をしない。擔任保母に遇つてお禮を言つて歸る位のことがない。幼稚園はお禮を言つて貰ふ爲に會を開くのではない。聞いて貰ひ度いこと、聞かせて貰ひ

度いことが澤山あるからである。但し今日の保護者會が充分に其の効果を發揮し得ないのは、會のしかたの悪いといふこともある。第一、全園の保護者を一度に多勢招くといふのもよろしくない。之は是非幾度かに分けて、保母がゆつくり話の出來る程度にしなければならない。第二、幼兒の保育狀態を見せるといふことは、種々の方面から利益のあることではある。しかし、それが保護者會の主なる目的になつてはいけない。保育もいろいろ見せ度い。話も澤山したい。それで半日たかくといふのでは餘り忙し過ぎる。

兎に角く、保護者會はもつとよく利用せられて協力者の會合といふ意義が發揮せられなければならぬ。しかし必ずしも年幾回の保護者會のみが相談の唯一の機會ではない。家庭の母は、何故もう少し幼稚園を訪問しないのであらう。世には保母の方から訪問して來る筈だなど、考へて居る家庭もあるかも知れないが、大いなる心得違ひである。

る。協力者とは言ひ條、どこ迄も家庭の方が主任者である。子といふ關係からいつても勿論のこと、

保母は一人で多勢の子保を引受け居るといふ點から言つても、母の方から幼稚園を訪ぶのが當然である。

(四) 幼稚園の方から注意せられて、やつと家庭の方で氣がつくといふ様なことが、先づ以て前後轉倒の至りである。況んや幼稚園からの注意が家庭に於て充分違法實行せられないといふ様のことがあつたら、たゞ意外千萬のことゝ言ふの他はない。

朝何時には出園させて下さい。大した理由もなく遅刻したり早過ぎたりする。何時に迎えに来て下さい。いつも～其の迎えが遅れる。手拭を持たせて下さい。それが又しても忘れられる。辨當は餌パンはいりますまい。相變らずパン屋の袋を其のまゝ持つて来る。隨分世話の焼ける話である。といふよりも、何故斯く我子の教育に意を用ゐな

いのか理解せられない話である。

(五) 幼稚園で如何なる教育をして居るのか、その大體位は家庭でも心得て居なければならない。

幼稚園では辨當の後には必ずうがいをさせるとする。之は幼稚園に来て居る時だけすればよいのではない。全體の習慣にしつこいと考へて居るのである。處が家庭では頓と之れを實行させない。幼稚園で骨を折つて斯ういふ習慣を養ひつゝあるといふことを熟知して居ながらしない。三度の食事に一回だけ幼稚園でうがいして、朝と夕と二回はない。之れで何の習慣がつこうか、數から言つても差引勘定明瞭な話である。之れは一例であるが何事も同様である。而して、何か新らしいことを始めて、習慣を養ひ度いと思ふ様の時には、幼稚園の方からも必ず家庭へ通知して置くべき筈である。家庭では通知せられたら必ず實行すべきである。是に始めて協力になる。幼稚園と家庭と子供が二様の違つたことをして居るやうのこととで、何

の教育が出来ようものぞ。

又幼稚園で唱はせる唱歌などにしても歌詞位は印刷して家庭に通じて置き度い。實は家庭の方で聞きへに來て然るべきであるが、多勢のことであるから幼稚園から頬つた方が便利であらう。そして、子供が家庭へ歸つて其の歌を唱ふ時、思ひ掛けない歌詞の間違ひがあることがある。一寸訂正

してやつて欲しいものである。之れは前に述べた習慣養成に比べれば小さいことであるが、之れも協力者たる當然の用意である。其の他數へてゆけば、あの事にも此の事にも、もう少し家庭と幼稚園とが協力者らしく其の實を擧げて欲しいものである。

感官の練習

文學士 大 横 快 尊

接交通する、第一の門戸である。外界の作用を受け入れて、心の一部分とする際の入口は、この感官であつて、世界に關する知識を得る唯一の入口である。

耳口皮膚の五官どころではなく、壓溫冷痛運動等を感知する機官が、十も十餘も吾人の身體に具つてゐるとの事である。その一々に就ては別に茲に述べないが、すべて感官は吾々が外部の世界と直

と云ふものは、その人には少しも存在しないのである。かゝる人は世間と没交渉であつて、世間と云ふことは全く無意味のことになる。丁度夢をみない長い夜の眠りに陥つたと同じである。感官があるからして始めて外界を知り、其の意味を知ることが出来るのである。吾々から一つの感官でも取り除いたならば、恐らく今迄と全く異つた世界観や人生觀を懷くやうになる。眼や耳の缺けてゐる、生來不具として生れついた盲人や聾啞者は如何でしやう。普通兒が遊戯に於て現すやうな、知能の發達すらも遂げることは、非常に困難である。盲人には光とか色彩とかの印象がないだけではなく、觸れると云ふ事の外には、事物の形體を知ることは出来ない。更に進で吾々に最も大切な、記憶の補助としても必要な、文字や書籍は何等の役をつとめない。聾啞者にも音響の世界は全く缺けてゐるので、音樂詠歌談話等の全部は、全く無意味なものである。僅かに前者にては觸覺が、後者は知覺と云ひ、知覺を構成してゐる要素を感覺

にては觸覺及視覺が、其缺陷を多少補ふのであるが、それとても極めて僅少の程度にしかすぎない。兒童がこの世に生れた當時は、恰も人形と同一であつて、感官は具つてゐても、其活きが少しも解發されてゐないから、光と音との世界に來り乍ら、見聞覺知する事は出來ない。臭も味もない世界へ現れたので、少々針でひつかゝれても痛を覺えない。感官は形があるだけで、外界を告げ知らず役目をつとめてゐない。幸に感官の活動が開發されて來るので、之をたよりとして、一々かゝる事柄を學んで行かねばならぬ。若し感官が働かない時には、丁度立ち上る方法がないので、立ち上がれないものゝやうである。これらの感官を使つて兒童は試み誤り訂正し、外界を一部分づゝ研究し自己の財産として行く。感官を通じて得らるゝものは、知識の根底となるもので、將來高等な知的作用の基礎となるものである。このものを心理學者は知覺と云ひ、知覺を構成してゐる要素を感覺

と言つて居る。近頃流行してゐる行動派心理學者の口吻をかりると、吾人は外界に對して反應するので、反應するにはその源となる反應させるものがある。反應させるものが、感官に活動し來ると、之を認めて吾々は身體で反應する。この反應させるものを認めた狀態は知覺或は感覺である。されば知覺感覺は知識の中心として最も大切で、之がない時には知識は得られないのである。

児童は生れると直ちに味を學び始める。生活に必要な營養物を食する爲に最も大切であるからである生後三日目位に甘味と然らざる味との區別が出来甘味を喜ぶのである。神經系統が發達し練習を累ねるにつれ、味の種類や強さの區別を段々覺え、そして感覺の何れに於ても同様な發達があるので、しかも其發達は何れも迅速である。生後一ヶ月間に大抵の感覺知覺は發達し、其後練習を累ね試験を積むに從て、其種類強度の區別が精密なるので、六才位の児童には、成人の有つてゐる感覺の

大部分は出來上つてゐる。唯だ區別することが成人の如く精細でない丈けで、其後もこの方面で發達します。嗅覺は生後一週日位で現れて來る。始めはよい匂と悪い臭との區別位であるが段々とこまかい區別が出来る。三才位の児童では、成人よりも却て嗅覺は鋭敏で、辨別も鋭いのである。皮膚から生ずる種々の感覺は味嗅の二覺よりも發達は少し徐々としてゐる。しかし刺激に對して快であるか否かは、生れると直ちに知れてゐるが、その何であるかと云ふ感覺は少しもないでのある。身體を洗ふ爲に湯や水へ入れられたり、種々の品物に觸れたりして、練習を累ねるので、各種の感覺が發達して來る。高等な感覺程其發達は遅々としてゐる。聽覺の發達は徐々としてゐるので、始めは聾者と等しい狀態である。生後一週日位経てから響と云ふ感覺が起り初める。聽くことが幼童に困難であることは永くつゝいてゐる。これは又一方に大層有利なことで、生れたらばかしの幼兒に

は睡眠と云ふことが最も必要である。若し成人の如く聽覺が發達してゐたならば、幼兒は神經過敏に悩まされねばなるまい。しかし大きな響をほんやりと響として感ずるのは生後數時間目から出来るやうである。とにかく赤兒は聽覺は發達してゐないので、赤兒に母親が種々やさしい詞ですかすも、之を聞くことは出来ない。さりとて赤兒をあやすことが無効であると考へてはならぬ。意味もない一樣の響と聞えてゐた母親の詞も、度々聞くうちに他人と母親との聲を區別するやうになり、練習するにつれ聽覺は段々と發達することである。視覺も同様である。光を感じることは生後直ちに現れるが、視覺と云ふ現象は餘程後のことである。視野は一様な光の視野で色彩も形體も距離も區別することは出來ない。練習を累ねるので段々とこれらが發達するのである。兒童を自然に放任しておいても、自然の發達、自然から與へらるゝ練習によつて、危険や障害のない限りは自然に發達し行

くものであるが、その發達を完全ならしめやうと云ふには、教育を施す必要があると思ふ。前に述べた通り感官の發達と感官の練習とによつて、其感覚及知覺は發達するのである。感官を廣義に使用して感覚機官やその關係してゐる神經系統を包含させやう。この方面が發達しなければ、感覚及知覺が發達しないことは明かであるから、その養護と云ふことは大切である。又一方には練習するから、感覚のこまかい區別が出来るやうになるので、この方面的練習は輕視することは出來ぬ。前者を感官の養護と云ひ、後者を感官の練習と名づける。此兩者は感覚及知覺の教育に最も大切な要素である。普通には感覚と知覺との區別を立てないで、兩語を同じ意味に使用してゐる。それでこの兩者を包括して感覚の教育と通俗に云ふが、實は感覚知覺の教育である。感官の養護は身體生理の問題に主として關係してゐるが、感官の練習は心理的事實の上に基礎を有つてゐる。そして練習

の結果うる心的現象は種々の性質強度の辨別が精緻となり、之を感じする性質が鋭くなると云ふことである。故に辨別性を鋭くする様な練習がこの教育には最も大切である。小学校生徒であつて、眼は通常であるのに赤緑青黄の四原色や強い光と弱い光とを區別したり、之を言語で云ひ現すことの出来ぬものは可なり多い。しかし色盲患者ではないので、色彩の感覚は完全であるに拘らずかかる現象がある。一部分は経験しない色に遭遇して之れを云ひ現すことの出来ぬ爲でもあらう、又一部分は色は知覺してゐるが、其名前を知らないと云ふ色彩名辭の教育が不足と云ふ爲めでもあらう。しかし彼等には可なり多くの色彩名辭も知つてゐるし、可なり多く色彩の區別も出来るのであるが、色彩と名稱とを聯合することが出来ないのである。その根柢となる原因はかかる練習が不足であると云ふことである。幼児が言語を使用する前に既に感覚知覺上の性質の區別は、慥

かに出来てゐることは、多くの兒童心理學者の研究で明かである。色彩に對するこの無知が長く續くと視官の缺點はないに拘らず色彩辨別の異常を呈するので、之を救ふには視官の練習を心掛くるより外に道はない。他の感官でも同様である。

さて、兒童は五六歳頃迄に感覚及び知覺の方向の發達が略完成し、成人の感覚及び知覺の大體と似た程度まで發達するのである。唯個々の印象の性質強度の區別が成人の如く精細明確になつてゐないだけである。されば此の時代殊に幼稚園時代の兒童には此の方面的練習が是非とも必要であると思ふ。最近にモンテソリー女史の教育法が重せらるゝのは種々の點からであるが、其一つとして感覚及知覺の練習に重きを置いた方法を取つたと云ふことは、心理學上の意味で云ふと知覺感覚の辨別を銳敏ならしむる練習をさせると云ふことで、かかることが教育上殊に此方面の發達の途中にあ

る兒童に、最も必要であることは云ふ迄もない。其練習の方法としては辨別の練習を課することであると云ふ事は心理學上の問題としては明かである。實際世人がこの方法を日常課してゐるのである。教育上の問題として今日に至つてモンテソリー女史の方法が俄かに尊敬せられ、天來の福音であるが如くに歓迎せられると云ふのは、少し不思議に感ぜらるゝ位である。しかし日常吾人が兒童に課してゐた練習は、決して組織的のものではなかつた。これを組織的にしたと云ふ物は女史の榮譽として尊重せねばならぬ。

教育訓練と云へば直ちに教師が必要であつて、

成人の知覺から流れ出た思想觀念を注入し、或は言語——始めは談話で後には文字によるが——の方法で之を兒童の脳裡に刻み込むことが最も重要で、此の方法によつてのみ兒童は正しい發達を遂げると思ふが、これは重大な誤謬である。勿論高等文化を兒童に與へるには、言語と云ふ器具を

使用せねばならぬが、兒童が受くる初步の教育訓練には教師も言語も必要ではない。何故と云へば感官から受けとる印象は即ち兒童が教育せらるゝ唯一の方法であるからである。兒童の經驗見聞知識は悉く兒童の教師である。兒童に如何に立派な説明を授けても功がない。寧ろ兒童が自分で一個の品物に觸れ之を注視した方が其効果は遙に著しい。色彩の辨別音の辨別寒溫の區別種々の味及びの區別明暗の區別等を始め悉くさうである。幼兒は教師なく、自分獨りで學問をしてゐる。この最も著しい例は遊戯である。されば次に遊戯と感官の練習と云ふことに就て話をしやう。(つづく)

『ポウル・ドンビー』(デッケンス) (一)

==== 英文學に現はれたる子供 (二十) ===

岡田みつ

フローレンスとポウルは、ピップチンさんの學校

へ來た。一所に附いて來た伯母達が今歸つて行つたばかりで、ピップチンさんは、火を後にして、新

來の二人を古參兵見たやうに檢閱してゐる所であつた。ピップチンさんの姪で、もうよい年輩の、氣の良ささうな婦人が、ビザストンといふ幼い生徒の他所行きの襟を外してゐると、バンキーといふ小女は(之も生徒だがもう此他にはないので)御客の前でべそをかいた罰で、裏の明き部屋へ遣られるところであった。ピップチンさんはポウルに對つて、「坊ちゃん、私を御好きになりきうですか。」と尋ねた。

「ちつとも好きさうでない。僕は歸りたい。此處

は僕の自宅でないから。」とポウルは答へた。

「さう。私の宅ですからね。」とピップチンさんは言ひ返した。

「いやな家だ」とポウルがいふと、

「もつといやな處がありますよ。不良な子供を押込める處は。」とピップチンさんが言つた。

「あの子は、押込められた事がありますか。」とポウルはビザストンといふ子に指をさして問ふた。

ピップチンさんがさうだと答へたので、ポウルは其日一日中、ビザストンの頭の先から足の先までを眺め、その顔の種々の表情に目を付けて、不思議な畏ろしい經驗のある子だと思つて居た。

午後一時に晝食で、それが大方腥氣なしのであ

つた。バンキーは、押込めの處から連れ出されて來て、御客の前で、べそをかく子は、天國に行かれないと、言はれてゐた。

言ひ聞かされた揚句に、やうやく一皿詰らぬ食物を貰つて、それに對してビブナンさんに感謝する句の入つた、此學校特獨の祈禱^{グレース}を唱へた。ビブチンさんの姪ベリーは、冷肉を食べ、ビブチンさんは、體質上暖い食物が必要だとかで、蒸氣^{けいき}の出てゐる、好い匂ひのする、出來たての羊肉で、御晝を食べた。

晝食後、雨が降り出して濱へ出られないし、ビブチンさんは、食事のあとは休息しなければ身體に障るとの事なので、子供達は、ベリーと押込めの部屋へいつた。此處は、大勢で入つて見れば、一向いやな所ではなかつた。ベリーが一所になつて跳ねまはつて、面白く遊んでやるので、子供達は喜んだのだが、ビブチンさんが怒つて隣室から壁^{ベット}をドン／＼叩いたので、遊も御止めになつてこ

んどはベリーが小聲で御伽話を日の暮まで聞かせてゐた。

夕食にはパンにバタに薄い牛乳が澤山あつた。ビブチンさんとベリーには御茶が入つて、殊にビブチンさんは、焼パンの暖い／＼のが數知れずあつた。ビブチンさんは、之を食べて隨分脂肪ツボくなつたやうだが、心の中までは滑^{すべ}くにならぬと見え、やつぱり恐い顔をして、その無慈悲な眼に少しの優し味も出なかつた。

夕食後に、ベリーは少々な針箱を持ち出して、精を出して縫ものをした。ビブチンさんは、眼鏡を掛け、大きな本を擴げて、居眠を始めた。而して火の方へ倒りさうになる度に、ハツと目を覺して、ビザストンが居眠をするツて、その鼻を指で彈いてゐた。

やつとの事で、子供等の就床の時刻が來て、皆臥床に入つた。バンキーは暗闇に一人寝るのを恐がるので、ビブチンさんは、必らずその子を羊見

たやうに追ひ立て、二階へ連れて行くので、而してバンキーは自分の室へいつても長い間泣いてゐるので、ピープチングは時々二階へ叱りに上つて行くのであつた。九時頃になると、ピープチングさんは一寸間食をしないと宜く眠られぬとかで、又よい匂が一時家中に漂ふたが、間もなく家内一統寝静まつてしまつた。

ピープチングさんの學校は、ざつとこんな様子であつた。土曜日には、ドンビー君がこの地へ來るのを、フローレンスとボウルは父の旅館へいつて一所に夕食をたべ、日曜一日も父と共に暮し、晝食の後は大抵馬車で運動に出かけた。さて日曜の晩が一週の中でも一番面白くない晩で、ピープチングさんは特に怒りっぽいと極まつて居た。バンキーは遊びにいつた伯母の宅から、嫌々連れ戻されて不機嫌だし、ビザストンは、親戚みょうが皆印度に居て遊びに行きどころがないから、日曜の禮拜式の間中、大人しく手も足も動かさずに居なければならぬの

が辛くて、或る日曜の晩、密かにフローレンスに對つて、印度へはどう行くか知つて居るかと尋ねた位であつた。

ボウルは、火の傍の小さな腰掛椅子に坐つて、ピープチングさんをいつまでもく熟じゅくと見入つて居るのが常であつた。此子は、ピープチングさんを見て居る時には飽あらきるといふ事を知らぬ氣に見えた。ピープチングさんを好きな譯わけではないが、一向長くないので、而して例の此子の氣分で、この老婦人に對して異様の興味をもつて居た。ボウルは、坐つては此老婦人を眺め、手を暖めては眺めするので、流石年功のピープチングさんも時にはどぎまきさせられた。

或晩、唯二人限りの時、ピープチングはボウルに向つて何を考へてゐるのだと尋ねた。

「あなたの事を。」とボウルは遠慮なく答へた。
「私の事で何を考へてゐるの。」とピープチングさんが問ふた。

「幾歳位かと思つて。」とボウルがいふ。

「そんな事を口にするものではありません。それはいけない。」と老婦人は答へた。

「何故。」とボウルが問ふた。

「失禮だから。」とビブチンさんは囁み付くやうに

答へた。

「失禮なの？」とボウルがいつた。

「え。」

「暖い羊肉だの、焼パンだのを皆食べてしまふのは失禮だつて乳母はあがいひましたよ。」とボウルが無

邪氣にいつた。

「あなたの乳母は性惡じょううわるの出過ぎものゝ、圖太い御轉婆女だ。」とビブチンさんは顔を赤めながら云つた。

「それは何の事？」とボウルが尋ねた。

「何でもよろしい。そら、御話にあつたでせう。物をきゝたがつた子供が、氣違きちがひ牛に角で突き殺されましたね。」としつべ返しをした。

「だつて、その牛が氣違ひなら、どうして子供がいろんな事を訊きたがるつていふのが解るンです。氣狂ひ牛の傍へいつて、内所で知らせてやる事なんて出来ませんもの。あんな話はうそだ。」

「うそだつていふの。」とビブチンさんは、呆れて

言つた。

「え。」とボウルが答へた。

「もし、その牛が普通あだなまの牛だつたとしても、うそだつていふの、疑ぐり人さん。」とビブチンさんが言つた。

ボウルは、その方面は一向考へに入れず、唯牛が發狂してゐるといふのを土臺に置いて結論をつけたのだから、此際はまづ自分が負けたと思つて黙つてしまつた。併し、やがてビブチンさんを降参させるつもりで、頻りに默想してゐるので、ビブチンさんも、ボウルが之を忘れてしまふまでは逃げるが上策と退いてしまつた。

この時からビブチンさんもボウルに對して同様

の妙な興味を覺えて、それからは二人向き合つて居ないで、ボウルの椅子を自分のに並べて置いてやるやうにした。すると、ボウルはピプチンさんと爐火の間に坐を占めて、その少しだけ顔に火の光をまともに受けながら、ピプチンさんの黒い着物を見、その皺を一本／＼に研究し、その無慈悲の眼を覗き見るので、ピプチンさんも折々は交睫む振りをして、目を塞いでしまふ事もあつた。御まけに、飼つてある一疋の黒猫が、火の前に蹲つて喉を鳴しながら、火に向つて目をしばだゝいてゐるのであるから、丁度ピプチンさんが魔法使の女で、ボウルと黒猫とがその役神にも見立てられた。

ボウルは、豫定の期が來ても格別丈夫にもならないので(但し顔色はよくなつたが)小さな車を一輛作つてもらつて其中に横臥して、いろはの本や何かを一所に載せて、濱へ曳いていつてもらつた。風變りの嗜好のある子の事で、車曳にと聲はれた赤ら顔の男の子を嫌つて、その子の祖父で、渦び

た瀧面のへな／＼の着物を着て居る老爺を雇つたこの奇妙な男が車を曳いて、フローレンスがいつも傍に歩いて、乳母が後からついて、ボウルは毎日海邊へ出かけていた。而して、何時間でも、車の中に、坐つたり横になつたりしてゐた。フローレンスはいつも／＼離れつこなしだが、ボウルは他の子供が傍へ來るのが何よりも嫌ひであつた。

遊び相手になり子供が來ると、

「どうか彼方へいつて御くれ。ありがたう。僕は御前に用はない。」といつた。又小さな子が小聲で如何ですかなど、見舞をいふと、

「ありがたう、丈夫です、御前あつちへ行つて遊んだ方がいい、でせう。」と答へた。

而してその子供の立ち去るのを見送つて、フローレンスに向つて、

「ね、姉さん他の子供なんかいませんね」といつた。此のやうな時には、ボウルは、乳母の居るのも厭はしいらしく、乳母が貝を拾ひにだか、話

相手を探しにだかぶら／＼歩き去ると大喜びをするのであつた。ボウルの大好きの場所は、大抵の遊び人のない淋しい處であつた。風がそよ／＼吹いて、波が車の輪の中までざぶり／＼来るその場所で、フローレンスが手細工をしながら傍にゐてくれるか、本をよんでくれるか、其とも二人で話でもして居れば、ボウルには此上の望みはないのであつた。或日ボウルは、

「姉さん。印度ツてど～？そら、あのピザストンの親戚のゐるところは」といつた。

「遠い／＼處よ。」とフローレンスは、仕事から目を上げて答へた。

「何週も掛かるの。」

「え、何週も／＼夜も晝もかゝつて行くの。」

「姉さんが印度に居れば僕はえ……母さんがなすつた事何でしたッけ。言葉を忘れた。」

「私を可愛がつて下すつたツていふ事？」とフローレンスが訊いた。

「いゝえ。そうではない。僕だつて姉さんを可愛いがるでせう。何でしたッけ！あゝ、死ぬツていふ事！もし姉さんが印度に居れば、僕は死んでしまひますよ。」

フローレンスは、急いで仕事を小傍に置いて、ボウルの枕近く顔を差し寄せて、撫て慈んだ。而して自分も弟がそんな遠い所に居れば死んでしまふと言つた末、

「でもボウルさん、今に丈夫になるわね。」といつた。

「え、僕は餘程よくなつたのですよ。死ぬツて僕のいふのは、その事ではないの。淋しくて悲しくて死ぬツていふ事なの。」

又或時その淋しい處で、ボウルは眠つてしまつて、長い間、大人しく寝て居たが、急に目を覺して、聞き耳を立て、はツと驚いては、また耳を澄して聞いてゐた。

「何が聞こえると思ふの。」とフローレンスが尋ね

た。

「^{なん}て言つて居るのだか知りたい。」とフローレンスの顔を熟^{じゅく}と見て「海がですよ、何を始終^{しゆう}／＼めのやうに言ひ續けて居るのでせう。」

「たゞ波の音なのよ」とフローレンスが教へた。
「え、え、でも波が始終何か言つて居る。始終同じ事を……あの向ふは何處?」とボウルは起き上つて、水平線の處をじつと見詰めた。

「他處の國があるの。」
とフローレンスが言つても、その意味ではない、もつと彼方の事を訊くのだ、と、ボウルは言った。

其後は、屢々二人の話の最中にも、ボウルは波が何をいつてゐるのだらうと思つては、話を途切れさせて、伸び上つては、遠い／＼、目に見えぬあなたを見てゐた。(續)

注意すべき子供の胃腸病

醫學士 石塚 保吉

△子供の胃腸の病氣は最恐ろしい

夏は胃腸の病氣が多い。大人も子供も胃腸をこわすのが多くて。しかもなか／＼重いのがあつて、之れが爲めに斃れる人も少くない。一般に世間の人は、胃腸病の恐るべき事、殊に小兒のそれの甚だ恐ろしい病氣を恐しいと思はないかと云ふと、大

恐るべきものである事をよく了解して居ないやうです。が小兒の病氣中、胃腸の病氣は最も恐ろしいものであります。なぜ恐しいかと云へば、此病氣が一番死亡率が高いからである。十中の七八と云ふ高度を示して居ります。世間の人が、なぜ此

人を標準にして考へるからでせう。大人の胃腸病

は、殆んど注意せられないほどに軽く見られて

居ります。それは醫者も患者もあまり重大視しま

せん。子供のも之れと同じに考へて居るやうです。二三日前から下痢しましたが、下痢だから打捨て、おいたらこんな事になりましたなど、云つて子供の重病患者をかつぎ込まれるのが多くあります。

子供の胃腸病は決して大人と同一視する事は出来ません。直に中毒症を起して、脳を侵し、瞬く間に其生命を奪ふといふ危険な性質をもつて居るのです。今一つ困難な事は、治療の方法が非常にむづかしいのです、ほしがる食べものを制限しなければならないのです。此危險と困難の爲めに、或は突然に斃れたり、或は非常の長びいてなかくなほりにくかつたりするのです。此恐るべき病氣を恐しがらないて粗略にした爲めに助かるべきものを受けなかつたり、簡単になほるものをお非常に

悪くしたりする事があります。

△下痢どめ薬の害

故に下痢位といふやうに軽々しく考へないで、なるべく早く醫者に見せて適當の手あてをするがよい。殊に注意すべきは、下痢に對して下痢どめを用ゐる事です、これは甚だしい危険です。これについては昔の學者と今の學者と説が正反対になつて居ります。昔の學者は下痢そのものを病氣と考へた。下痢さへとめれば病氣はなほると思つて、さまでな下痢どめを用ゐたのです。

今の學者は、下痢は病氣をなほす爲めに、自然が人類にそなへつけた一つの大切な作用であると説いて居る。即ち體内にある毒物を排泄する作用なのです。これは自然の特別の恵みであるから感謝しなければならないのです。之を敵視するなどはとんでもない間違ひです。

下痢があつたら、むしろ下剤をのんで毒物の排

泄を助けた方がよろしい。その薬を用ゐると、ど
の場合にも結果は屹度わるい。型におしたやうに
わるくなるにきまつて居ります。

△下痢に牛乳は禁物

今一つ真違つた考へは、下痢の時に牛乳を用ゐ
る事です。之れも世間でよく實行せられて居るや
うですが、下痢の際牛乳を用ゐる事は有害です、却
て病勢をほげしくします。之も昔の人は胃腸病は
堅い固形物を食した崇であると考へた。故に柔か
い流動物をとれば必ずなほると思つたのです。大
人には多少よいかもしけないが、子供の場合には
全く正反対である。牛乳をのませるとますく病
氣がひどくなる。牛乳は黴菌の繁殖を助けるから
です。該病にかゝつた子供に牛乳をのませる事は
効果のないのみならず、却て有害です。それが爲
めに病氣が重（だら）つた實例も少くありません。

△胃腸病の原因

此頃の病氣の原因になるものは、氷水が多いや
うです。就中氷あづきがよくないやうです。水密
糖、ばな、枇杷なども胃腸病の原因になりやす
い。間接には、寝びえ、水いぢりなどです。氷あ
づきなどは氷そのものがよくないのにさづきは腐
敗しやすいから、暑さで弱つて居る腸胃が痛めら
れるのです。

△家庭の手當

下痢の場合には直に醫者に見せるのは云ふまで
もない事ですが、家庭に於てもし出来るならば、
第一に灌腸をやるのです。それから食事をやめて
しまつて、おも湯とか葛湯またはそつぶなどの如
きうすいものをほんの口をぬらすだけ位に與へる
がよい。

胃腸病には減食もしくは餓餓療法が最適當にし

て最有効です、多くの人は、下痢をすると立派な肉でも落ちてゆくやうに考へて、衰弱するといふので、食慾のないものに無理に牛乳をやるとか、その他の食物を強ひるとかするやうですが、これは根本的に眞違つた考へです。それよりは二三日位絶食でもさせると軽るいのならば直になほつてしまひます。

△饑餓療法

饑餓療法は最大切な療法であります。此療法は世間の人には恐れられて居て、しきりに反対せられて居りますが、少しも恐ろしい事ではあります。それが爲めに衰弱するからと云て之を忌避すると、衰弱を恐れて死を恐れないといふやうな結果になる。該病は食物に關係する場所がわるのであるから、食物を制限してなほしてゆくより外に工夫はないのであります。食物に制裁を加へないで、即ち原因をふせがないでおいて結果を

おさめやうと云のは、到底不可能の事であります。これが爲めに一時衰弱してもそれはなほる爲めにする衰弱です。食べても／＼衰弱して遂に挽回すべからざる運命にたち到るよりは遙によい。

△薬物療法よりも攝生療法

世の人は藥物療法に絶對の信任をおいて居るやうであるが、それよりも攝生療法の今一層大切な事を了解してもらいたい。むやみに薬々と云つて、あの薬を試みたが、此薬を飲んで見たが一向に効果がないなど云つて、矢鱈に薬を重要視する傾向があるやうです。今日の學理の上から云へば攝生療法の方が藥物療法よりはずつと大切なので、攝生療法さへ適當にやれば病氣は自然になほるものであります。どうか一般にその考になつてもらいたいものである。さうすれば過も少ないし、醫者の方でも仕事がしやすくなる。

△下痢のない胃腸病

今一つ間違ひやすいのは、下痢がなければ胃腸

病でないと早合點する事である。然るに下痢のな

△四歳以下の幼児に海水浴は 却つて有害

い胃腸病の方が却て重症なのである。つまり病氣の起つた場所が上の方にあるので、下痢にまでやかない中に中毒してしまふのである。直腸とか大腸などならば、直に下痢を起して毒物を排泄してしまふ事が出来るが、場所が隔つて居ると毒物が外に出るまでに時間がかかる。爲めにそれより先きに身體の方に吸收せられてしまふのです。下痢がないから胃腸病にあらずと早のみ込みをしないで熱が急に高くなつたりした場合には直に醫者に見せるやうにするがよい。風邪の熱だと思ふて油断して下痢が起つてから醫者に見せるのでは手おかれるやうなものです。却つて病氣を設けにゆく

海岸などは砂がやけて居て非常にあつい、さういふ處へ幼い子供をつれてゆくのはどうであらう。別墅もある人は格別、間借りなどして狭い所に雑居するなどは考へ物でせう。海水浴は四歳以下の幼児には決してよくありません。そんな幼児が海滨につれてゆかれるのは、大人の犠牲に供せられるやうなものです。却つて病氣を設けにゆく

しまう事がある。下痢が出来ると毒物が身体に入り込むのである。爲めにそれより先きに身體の方に吸收せられてしまふのです。下痢がないから胃腸病にあらずと早のみ込みをしないで熱が急に高くなつたりした場合には直に醫者に見せるやうにするがよい。風邪の熱だと思ふて油断して下痢が起つてから醫者に見せるのでは手おかれるやうな結果になる事があります。

保育入門

(七)

倉橋惣三

六、幼稚園教育と設備(下)

三

幼稚園の設備の中には、恒定性のものと、易動性のものとある。前に述べた處の遊園、部屋分け等大きい建築に屬するものは、即ち前者であつて、初めの設計に於て深い注意を要することは勿論であるが、その後容易に變更することの出來難いものである。従つて場合によつては不完全と氣がついても其のまゝにつゝけて居なければならぬことが屢々ある。之れに對して易動的な設備、すなはち教具とか器具とか裝具とかいふものは、一度び造つたら、教育上悪い點を氣づいても從來のまゝに製用しなければならないといふものではない。又少しの研究、少しの考案によつて、それを改良もし活用もすることが必ずしも困難でない。

元來、設備といへば如何にも固定的なもの、様な感じのみ伴ふものであるが、實は活きたものでなければならぬ。殊に易動性の設備に至つては保母の心のまゝに従つて、活きて働く——生命を持つたものでなければならぬ。而して、その生命を以て幼兒の生活を支配してゆくものでなければならぬのである。然るに多くの場合、此の活用が頓と怠れられて居る觀がある。假令ば、幾年も々々も、机は同じ排べ方に釘づけせられ、額は年々に色があせてゆく他一度も掛け替へられるなく、飾棚の中には光澤のとれた、剥製や標本が居睡つて居る——と言つた風の保育室では、設備は何の生命をも有して居ない。何等活きた働きをなさないのみならず、沈滯した、魯鈍なる空氣を以

て、却つて幼児に消極的な影響を及ぼすだけである。幼児教育に最も必要な清新の氣が、斯かる

設備によつて、到底得るべきではない。而して此の責任は一つに保母の不精に屬すると言つてよい。

幼稚園教育者は小學校教育者の如く、明日の教案に就て、多くの時間を費す程の準備を要するものではない。しかしながら、其の日々々が済めばよいといふものでないことは勿論である。頭の中では絶えず次の保育の計畫をして居なければならぬ。その中でも、設備に就ての考案を怠つてはならない。あの机を斯う排べて見ようか。或は

明日は一つ机を皆出して椅子だけにして見ようか。或は飾棚をあつちの隅へ移して見ようか。あの額の繪をあれと取り替へようか。或はあの小さい額を皆はづして、大きいのを一つに替へて見ようか。あの花瓶をかへよう。あの置物をかへよう。季節により、月により、乃至日により、殊に保育上の

目的により、隨分細かく意を用ゐなければならぬのである。

而して、その用意の準據となるものは何か。要するに前述幼稚園教育の四原則を完ふするに他ならぬのであつて、幼児の自發生活を促進する様に出来得る限り相互的になれ得る様に、その生活のなるべく具體的なる様に、よき情緒的習慣を養ひ得る様にといふに他ならぬ。蓋し此の四原則は、設備そのよろしきを得れば自らに完ふし得らるるもので、又設備の力を俟たずしては、眞によく之れを實現し得るものではない。

四

幼稚園の設備は、之れによつて教育を行はれ易からしめるのみでなく、設備自身が大いなる教育力を有して居るものである。蓋し、人を取り囲んで居る總ての環境は、必ず何等かの影響を其の人には及ぼすものであつて、之れを廣く『環境の感化』と名づくるが、幼児の精神は殊にその環境の感化

を破り易い状態にあるものである。明るい室に入

五

れば快活になる。暗い室に入れば陰氣になる。細緻精巧を極めた纖弱なる外圍の内にあれば、心自ら小弱となり、堅牢豪壯の外圍の内にあれば、氣自ら強健となる。所謂居は氣を移すといふことが幼児に於て最も著しいのである。

設備をして秩序正しからしめよ。幼児の生活は自ら秩序正しくなつて来る。設備をして清潔ならしめよ。幼児は自ら清潔を好みざるを得なくなる。高尚も、下品も、優美も粗野も、之れを口に説いて幼児を感化することは容易の業でない。しかも、設備の與へる陶冶力は、比較的容易に其の目的を達し得るのである。

幼稚園の設備を観て、其の保母の人柄風尚の大體を察することが出来、又其の設備の間にに行はれて居る幼児の教育状態が略ば察することが出来る。之れ程設備は幼稚園教育にとつて重要なものである。

幼稚園の設備に就て、すべてを通じて最も綿密に意を用ゐらるべきは衛生上の顧慮である。

(一) 室内は日光の豊富と換氣の完全とを以て必須の條件とする。又塵埃の豫防も大に用意せらるべきことである。殊に冬季、窓障子が密閉せらるゝ時には、完全なる換氣設備の要求が一層多くなる、ストーブ、火鉢等による暖室法を用ふる場合に於ては尙更のことである。換氣設備のない人工暖室法は寧ろ一種の冒險と言つてよい位のものである。

日光の豊富といふことは、室内のあかるさを増すといふこと、日光による自然的消毒作用を充分ならしめるといふこと、此の二つの意味に於て深く意を用ゐられなければならない。勿論日光直射の硝子窓に日覆を用ゐないで、其の附近の幼児の頭部を熱せしめる如き極端な不注意は心すべきことであるが、幼児に直射しない限り、日光は

充分さし入る様にしなければならない。

總ての室及び廊下の床に就ては、常に清潔に洒掃が行き届いて居ることは勿論、塵埃の浮動することの少ない様に設備せられなければならない。之れは幼兒の穿きものゝ關係もあるが、設備の方から第一に注意しなければならない。塵埃に關しては、椅子の蒲團なども深く意を用ひらるべき必要がある。

(二)、すべての器具に就ては、病菌傳染の豫防に最も細心なるを要する。殊に共同使用品に就ては一層深く氣をつけなければならぬ。現今の幼

稚園に於て共同の手拭を用ゐさせる様の處は全然無いと思ふのであるが、共同の湯呑茶碗はまだ可なり行はれて居る。而して之れが幼兒にとつて恐ろしいデフテリ一菌の傳染等にどの位危險のことであるかは一寸考へればすぐ分ることである。

現今幼稚園に對する批難の中、衛生上の危險といふ點は、最も重大なることであつて、多人數集合する處には多少の危險を免れないと言へばそれ迄であるが、出來る限りの豫防設備は是非肝要のことである。

七、幼稚園教育の方法

第一、其の基本——自發遊戯

幼稚園教育法の研究は、要するに幼稚園教育の四原則を如何にして最よく發揮せしめんかの研究である。小學校其他の教育に於けるが如く、與ふべき教科教材が國家的社會的に規定せられてあつ

て、如何にして之を教授せんかとする研究とは、全然趣を異にするものである。換言すれば幼兒をして如何に充分に且つ正當に生活せしめんかといふ問題に他ならぬ。之れ以下であつてもならぬ。亦

之れ以上であつてもならぬ。而して、幼兒の生活を真に自發的ならしめ、相互的ならしめ、具體的ならしめ、習慣的ならしむるもの、遊戯に如くものはない、幼稚園教育法の基本は實に遊戯であるを得ないのである。

一

遊戯が兒童の自發生活であることは多くいふまでもない。今日の學說に於て、兒童の諸精神活動が其の目的的意識なく、その活動のために活動するものが即ち遊戯であつて、他から餘儀なくせらるゝのでは勿論なく、又自ら他の目的の手段としてもなく、純自發的に營まる、所の生活である。而して、その精神活動の中には、極めて簡単なる感覺活動もあり、衝動活動もあり、又複雑なる情緒的活動及び知的活動もある。従つて其の種類も多くの範圍も廣いものであるが、兒童殊に幼兒に於ては、之等の精神活動が直接現實の生活に使用せらるゝ必要と機會とが未だ少ない。しかも、活潑

なる自學性は無智に閉塞せられて居るには堪へない。即ち絶えず活動する。之れが幼兒の遊戯の廣きに亘り。且つ強い所以なのである。

古い考へでは、此の自發的の遊戯に深い意味を見出すことを知らなかつた。そのため、遊戯と教育とは或る意味に於て敵同志の様にさへ考へられて、教育者の遊戯に對する態度は、多くは如何にして之れを禁止しようかといふにあつた。たかゞ、娛樂による精神の慰勞位のこと考へるだけであつた。『よく遊びよく學べ』と言ふ格言は、よく學ぶためによく遊ぶことの價値を認めたもので、『よく遊ぶ』といふこと自身に對して、充分その價値を認めて居なかつた。しかし、自然が兒童に自發的遊戯を與へたことは、左様な消積的の意味のみではなくして、幼兒生活に對し大に積極的の意味を有して居ることである。試みに問ふ、若し子供が遊ばなかつたらどうであらう。感覺も運動も衝動も高等精神活動も、それが直接現實の生活に

用のある迄、何の活動をもすることがなかつたら

どうであらう。茲に於て、遊戯は單に自發的であるといふのみならず、自然的に幼兒を教育する所のものであると言へるのである。之れによつて其の感覺が練習せられる。衝動が教化せられる。情性が陶冶せられ知性が練磨せられる。之れ幼兒の遊戯はたゞに自發的生活であるのみでなく、自己教育の生活である所以である。

教育といふことになると結果の豫想が伴ふ。しかし、自發生活には結果の意識はない。この點が自己教育としての幼兒の遊戯の深く考へらるべき點であつて、また陥り易き誤りである。彼の往々にして行はるゝ遊戯の課業化は、すなはち此の誤りの例である。勿論、課業化せられたる遊戯——普通に幼稚園教科として考へられて居る所謂共同遊戯——にも、或る教育的價値を(身體及び精神の操練として)有しないものではない。しかも、茲にいふ、幼稚園教育法の基本としての遊戯は、も

つと自由な、もつと廣い意味のものである。

元來、自發的遊戯の眞面目は二つの特質に歸し得るものである。其の一つは『結果の意識から離れたる自由』といふことであつて、前に述べた通りである。第二の特質は、此の第一の特質から當然生じて来る所の『結果によらず活動それ自身より生ずる快感』である。簡単にいへば、強ひられて居るといふ感じなく、而して常に愉快でなくてはならない、若し此の二つの特質に於て他少とも反する所あり缺くる所があつたならば、それは自發的遊戯の本質を失つたものであり、従つて、自己教育の本性を完ふしないものである。

二

遊戯は勿論單獨であることもある。しかし、幼稚園に於ける相互中心生活を、最もよく行はれ得しむるものである。遊戯の形式は多様であるから、一人が大將となつて他は之れに從属することもある。一人がお姫様となつて他は之れに奉仕するこ

ともある。しかも、其の従属者も奉仕者も、自發的遊戯の愉快を味ふこと、大將、お姫様と何等の違ひものであつて、形式上其の遊戯の中心人物が誰れであるにしても、互を樂ます關係に於ては、全く相互的である。況んや、遊戯上の役目が平等である場合に於ては、明かに相互中心的である。換言すれば、己れ等以外の第三者を中心として樂ませて貰つて居るのではない。但し、自發遊戯に保姆が加つてはよくないといふのではない。

保姆も亦相互中心の相互の中に加はればよいのである。而して、自發遊戯が其の眞面目を發揮して、自發的遊戯としての愉快の沸騰點に達する時は、此のことが自ら容易に行はれるのである。若し何時迄たつても保姆が中心として幼兒達に意識せられてのみ居るならば、幼兒の自發性に缺陷があるが、保姆の方に誤があるか、孰れにしても自發遊戯として不自然なることである。而して、幼兒の自發性に缺陷のあるべき筈がないとすれば、責任

は保姆にある。幼稚園教育の原則を充分理解して居ない結果と言はざるを得ない。

最も教育的に遊ばせる保姆は、幼兒達をして幼兒達で遊ばせる人である。そこまでの誘導はしなくてはならない。しかし、それ以上尚ほ自分が遊ばせなければならないのは、下手な子守のするお相手である。遊戯の研究の熱心家に往々此の苦心の缺けて居る人がある。

三

詩人シルレルの言に『人は遊べる時最完し』といふ句がある。幼兒遊戯に於ても、其の全生活が最も具體的に行はれる。遊戯の分類をなさんとする場合には、その遊戯に於て活動する主なる精神活動の一つを擧げて、或は感覺的遊戯とか情性的遊戯とか意志的遊戯とか、更に之れを細別して、視覺遊戯、聽覺遊戯などの名稱が用ゐらるゝこともある。しかし、之れ研究上、児童の生活を抽象分解した上のことで、遊べる子供そのもの、生活

は、そんな離れぐのものでは決してない。例會ば一つの色紙を持つて遊んで居る時に、決して色の感覚だけが活動して居るのではない。競走をして居るとき、足の運動だけが活動して居るのではない。

勿論遊戯によつて多少其の活動の範圍割合を異にすることはあるも、要するに全我の活動であるといつてよい。遊戯が熱心に樂まれて、自發的遊戯の眞面目を發揮すればする程、此の具體的たることを加へるのである。而してこれは、課業に於て、體操に於て望み難いことである。實に遊戯程常に幼兒の生活の全體を活動せしめるものはない。

尙ほ又、具體的といふことの第二の意味たる、實際生活との接近といふことも、遊戯に於て充分得ることが出来る。といふよりも、戯遊が即ち幼児の實際生活に他ならぬのである。少くも最も眞切實なる實際生活なのである。多くの人々は、遊び方、遊ばせ方に就て、甚しく苦心する。しか

も、最もよき遊び方を知つて居るのは幼兒自らである。他より數へる時、往々にして形になり假りになる。自分で遊ぶ時、實に生命ある實際である。

一體に幼兒の遊戯が、成人の餘戯娛樂と同じく、軽い意味のたゞむれごとに考へられて居ることのあるのは、非常なる誤解である。遊戯は幼兒につては、實に一生懸命である。本眞剣である。心理學上は遊戯を以て生活の準備的練習であると説明するけれども、遊ぶ當人にとっては決して稽古ではない。假作ではない。芝居ではない。遊戯の教育的價値の主要なる一點が實に是に存するのである。若し幼兒が稽古の様な張の少ない心を以て遊ぶものならば、又假作の様な餘裕ある心を以て遊ぶものならば、又芝居の如き、傍観者の鑑賞を念として遊ぶものならば、遊戯の教育的價値は餘程強度の弱いものになる。それ等も亦或種の價値を有することもあるかも知れないけれども、幼稚

園教育法の基本として要求する自發遊戯は、もつと眞面目な、眞剣なものでなければならないのである。而して眞によく遊ぶ時此の條件は自ら完うせられるのである。

四

習慣的といふこと、殊に情緒的習慣を養ふといふことは、換言すれば概念的にしない、理屈的にしないといふことに他ならぬ。更に言ひ換へば、日常生活から、理外の領會、言外の説明として、

無意識的に、いはゞ不用意の間に浸み込むといふ

ことに他ならぬ。自發的にして、相互的にして、具體的な遊戯は、實に此の條件を完備するものである。勇しい遊び、優しい遊び、快活な遊び、それは皆、幼兒の全人格へ勇しさ、優しさ、快活さを浸み込ませるものである。

殊に幼時の遊びの相手から、いつとなく受ける情緒上の感化は、刹那的に強い覺醒や、瞑想の理に解けて来る理解や、さういふものに比較して淡

く、かすかなものであるけれども、度を重ねて濃く、後に至つて懷想して意外に顯著なるものである、即ち、情緒的基調の底深い一底流をなすものである。

五

遊戯は斯くの如く、幼稚園教育の四原則を完全に發揮し得るものであるが、幼稚園教育の顧慮に就ては、何といふに、これ亦、最も完全に其の條件を具ふるものである。

(一)、身體の健全なる發達、に遊戯の適切なるは言を俟たない。勿論遊戯の場所、設備に關する注意が不完全である場合には、身體の健康上必ずしも望ましからぬ如きことがないとも限らない。しかし、それは設備の缺點で遊戯そのもの、弊ではない。假りに理想的なる遊園があつて、其處で充分自發的な遊戯を樂ますとすれば、此の位健康上有益なることがあらうか。又必ずしも完全に理想的でないにしても、戸外に於ける遊戯は此の點

から最も獎勵せらるべきことである。

(二)、神經系統の養護、に關する第一の注意は要するに神經の過度の疲労を避くことにある。而して、遊戯は其の自發性に基いて、決して無理とか過度とかいふ疲労を神經に與ふるものでない。

愉快の消滅は常に最よき疲労の合圖を與ふるものであつて、それが自發的である限り、適當に中止せらるゝなり、他の遊戯に轉換せらるゝなりする。恐るべき神經疲労の弊の如きは決してないのである。たゞ、設備の不完全よりして、空氣の不良等より生ずる過勞は別問題であるが、よく注意せられなければならない。

(三)、個性の保存、遊戯は自發である。自己の遊戯である。模倣することはあつても、自己の嗜好に基いて模倣するのである。此位よく個性の保存の行はるゝものがあらうか。遊戯によつて、其の幼兒の個性を觀察することが出来る位である。集團教授等の課業に於て、常に完全に個性を保存

するといふことは、實に容易になし難いことである。しかも、遊戯に於ては、おのづからにそれが行はれる。

* * *

人或は言ふかも知れない。しかば幼稚園に於ては只放任して自由なる遊戯をのみなさしむべきか。殊に論は論として、實際上自由にのみ任せ難きことが屢々あると。答へて言ふ。遊戯のみが幼稚園教育といふのではない。之れは幼稚園教育の方法の基本なりといふのである。次に、自發遊戯即ち放任ではないことは前に既に述べた(第二『幼兒の教育』の二)通りである。而して、其の誘導は二つの方面よりせられる。一つは設備によつてある。一つは遊具によつてある。設備に關しては前に述べた。遊具に就て次に述べなければならぬ。

幼稚園の遊園とアスファルト

倉橋生

近來東京市の小學校教育界に於て、運動場にアスファルトを敷くことの可否に就て議論が行はれて居る様である。その本論は先づ別として、幼稚園の遊園にはどうであらうかといふことを考へるに、極くいゝ序である。のみならず、幼稚園の遊園と小學校の運動場とが兼用である如き處も無いではないのであつて見れば、問題は幼稚園教育にとつて對岸の火ではないのである。

先づ吾人の結論からさきに言へば、幼稚園の遊園として、アスファルト敷地は絶対に不賛成である。假りに種々な條件から小學校の運動場には採用せらるゝことがありとしても（それも不賛成であるが）幼稚園の遊園には絶対に不適當である。

(一) 幼稚園の遊園の必須條件の一つは、自然的なるべしといふにある。アスファルト敷きは全

然此の主旨に反する。一ト目見た感じ（之れが児童教育には極めて大切である）から言つて左様である。事實の上から言つて此位人爲的、非自然的なものはない。

(二) 自然遊園の傾斜が全然ない。餘りに平板である。登ぼるとか滑り下りるとかの大傾斜のみでなく、踏むに色々の小傾斜のあるといふことが幼兒の運動に必要であるのに、それが全く缺けて居る。換言すれば一步々々の踏みごたえといふものが無い。

(三) 彈力がない、そのため一歩々々の震動が足に響き、脊髓に響き、第一不愉快であり殊に有害である。

(四) 滑かに過ぎて轉倒し易い。殊に極く硬質であるため轉倒の結果に危険が多い。歩き慣れて轉倒しない様になるとも、それだけ意を用ゐなければならぬ損がある。運動の自由を制限するものと言はなければならぬ。

(五) 夏に熱く、冬に冷い。殊に夏季日光の反

射のため、之れに接續する保育室内まで熱くする。

「初夏の頃」より

若き父

況んや其の焦げるような表面で、ゆつくりとした遊びは出来ない。覆をつくれば多少之れを免れ得るとしても、全國に涉つて日覆をつくることは困難でもあり、又そんな餘計なことを要するのが即ち一つの缺點である。

(六)、殊に吾人の最も不適當とするは、四季のうつり變りが何等の自然的情景を添へぬことである。春が來たとて若草一つ芽を出さぬ。夏草の繁りもない。秋の落葉もなく。ぬくくとした冬の日和の面白味もない。折角の土壤に蓋をして、大げさに言へば、軟かいマザーランドと幼兒との間をこんな固いもので隔てゝ仕舞ふのが惜しいのである。こんな幼い時から、左様な非自然的な、無趣味な、見るからにしかづめらしい處へゆかなければ教育を受けられないであらうか。

幼稚園にアスファルト敷きは、どう考へても贅成が出來ないのである。

毎晩夕刊が來ると坊やは支闌に飛んで出て其場ですぐ新聞を繰り擣げ乍ら、自分に興味ある朝刊以後の出来事の發展を豫測したり、或は挿畫や寫眞版に依て、何か新しい事件の發生を推定したりする。例へば「東京市に於けるベストの傳染系統論」であるとか、「所澤に於ける重松中尉墜落の顛末」とか「代々木葬場殿に於ける土木工事述抄の程度」とかは此の二三日來坊やに取て最も興味ある時事問題である。

いくら想像力が偉大でも、玄關で繰り擣げた新聞を一寸睨んだ丈では素より事件の真相が坊やに知れやう筈がない。眉の間に口の周圍に探究心と不平との筋肉を幾度か伸縮させて居た坊やは、忽ちかけ出して來て其新聞を兩親に突き付けて多量な矢職が早なしがもくどい質問を浴せかける。

抑々兩親の答辯振は。議會に於ける大臣や政府委員の答辯の立場とは違ふ。第一に反問を報いる事を避けなければならぬ、第二に問題を不得要領化して質問の闇外に脱却する事が出来ぬ、第三に概略的抽象的に問題を締め括る事が出来ぬ。かくして該當事件の個々の變化を極めて具體的直觀的に説明して行くと共に、全體の過程が蚕一を保つやうに部分を整理して、しかも實行上の何等かの規範を示すやうな結論を作つてやらなければならぬ。

二人の熱心なる答辯者が代る／＼此の離間題の衝に當て奮闘したのは勿論の事であるが最も困難を極めたのはベスト菌の説明であつた。併し漸次に委曲を盡して説き來つて、やがて問題が開展して風の殲滅となり登の跳躍となるに及んでは「たしかに之はお伽噺以上だぞ」と云ふやうに坊やは眼を光らせ頬を赤くして跳り上つて喜んでそれから／＼と先きを聽く。

フレーベル自傳

(第八回)

((マイニンゲン大公に宛てたる書翰))

倉 橋 惣 三 譯

五十六、算術と圖畫

算術の教授の結果は私を驚嘆せしめました、而かも私はそれを更らに博大なる應用と廣汎なる範圍に導くことは出來ませんでした。

算術の機械的な法則は渦の中に入つたやうに私をぐるぐると旋轉しました。

先生の名はクルユシでした。

算術の授業は數學界では華々しい結果を齎すに

シユミツドも既に當時この教授法の不備を感じてゐました、彼は該問題に就てその後研究した第一原則を私に語りました、私は直ちに彼の考を賞讃してやりました、何故ならば私は彼の考へには多方面といふことを徹頭徹尾科學的な根據に基いてゐるといふことの二つの重要な特性があるといふことを認めたからであります。

圖畫の教授も亦甚だ不完全でありました、殊にその初步の授業に於て然りであります、けれども後期になつて課する練習の一つである種々の大きさの角柱を寫生させることゝ、日常生活の實際的であり、それを受け容れることに於て餘りに機械的である何物かゝりました。而してヨシアス、

ミツドの方法は未だ現れてゐませんでした。

五十七、地理と博物學

自然地理に於て何處の學校でも課するやうな多くの彩色地圖を以てする方法は顧られませんでした。

トブレルといふ元氣のいゝ若い人がこの科の主任教師でありました。矢張この私も私には餘りに積極的な教授法を施して居りました。（註、フレーベルは積極的教授法を暗誦若くは結果を聞かさるゝことの意に使ひ居れり）この學科の始まりは殊に私には不愉快でした。それは生徒が海といふものゝ性質や廣さに就て何等の概念を作り得ないにも係らず、いきなり海底の記事を以て始まるのです。それでも授業は驚異を惹き起します、而して児童の迅速なる口答に依つてなさるゝ印象を通じて不知識の間にそれを覺えさせてしまふのです。

博物學では私は植物學を聞いただけでした、主任教師はホップと云つて他の教師と同じやうに元

氣のいゝ若い人でした、その人も亦全學年に對してこの秋の教授案を立てゝゐました。彼に依つて整理され又提出された課程には優れた點が澤山ありました。例へば——葉と花の形狀、位置等を夫々に話す場合——彼は先づ級全體と彼との間の問題に依つて出来るだけ多く種々の形狀を集めます、次に彼は是等の中から彼等の身邊にある實物を撰び出して示します。

斯く興味裕かに施され又その効果も明かなるべきこの課業も實際の應用の上に行くと非實際的で役に立ちませんでした、私は前後矛盾の局面とでも名づけやうと思ふ位でした。

（後一八〇八年に再びイベルドンを訪れた時にはトブレルもホップも最早そこにはゐませんでした）

五十八、ペスタロツチと其後輩

獨逸語の教授方法には私は全然同情することが出来ませんでした、この方法は諸方の後期の學校

讀本に應用されたものではありますけれども、

此所でも亦勝手な不生産的な教授法が一步毎に烈しく私に逆りました。

唱歌は數學で教へられました。

讀書はベスタロッチの有名な「エー、ビー、シ

」で教へられました。

「備忘錄」——すべてこれは私の内にボンヤリと貯へられてゐました、その值打は自分にさへも分りませんでした、けれども私の智的位置はこれらの経験を経過してもつと固定したものとなる傾向がありました。當時の私の状態に就ては出来るだけ正確に上に述べました、即ち得意であつたり、失望したり、生氣があつたり、張がなかつたりしたのであります。

ベスタロッチのこの偉大なる智的機關に依つてベスタロッチ自身が魂を奪はれ、心を亂されてしまつたといふことは彼が彼の意志、方案、目的に就て、何等の定説を示してゐないといふ事實に現れてゐます。

彼は常に「進み自ら求めよ」（如何に見るべきか如何に聞くべきか、如何に知覺すべきかを知つてゐる人は自分で非常に都合がいい）「それは立派に働く」と言ひました。

ベスタロッチの愛すべき性質が私の心得たと同じやうにすべての人の心を得ないと、又彼の性質が教師達をして生活及び智的勢力を熟慮せしめ、互ひに寄合つて、一つの聯合團體を作るやうにさせてしまつたといふことには驚きましたし、又理解することも出来ませんでした。

彼の朝夕の挨拶は、簡単な中に非常に情が籠つてゐました、而かも私はこの挨拶の中に後年起るべき不幸なる反目の徵かな兆候を既にその當時認めました。

五十九、會心の職住

私は(一八〇五年)十月のながは央に長逗留をすべく出來るだけ早く歸つて來やうと決心してイベルドン

を去りました。

フランクフルトへ歸ると直ぐ私はコンシストリアムからの任命狀を受取りました、（註、獨逸のコンシストリアムとは僧職會議の一體なり、國教の僧侶の全體より組織せられ宗教、教育者の統御の下に國內の教會及び學校の事業を監視す、學校設立者及び教師たるんとするものにはコンシストリアムの協贊を経ざるべからず）

私の瑞西からの歸省を待つて居た模範學校（これは事實に於て男子と女子との二つの學校であつたのです）の仕事といふのは全校に亘つての全然新なる課程と教授案との作成を手傳ふことでありました。

學校には男子の級が四五組あり女子の級が二三組ありました、全體合せると二百人近い兒童でした。職員團は學校に居る四人の教師と校外から通つて来る九人の教師とがありました。

私は學校の窮乏や現狀や其處で與へられる教授

やらに就て熱心に思考して居りましたのでこの計畫の遂行を私達に課せられた條件の下に殆んど一手に引受けてしまひました。

私の作つた統一的組織は、教師達をして或る著しき個々的の不便を感じしめ、又今までよりも多く教師達の時間を要求したのでしたが、當局者の賞讃を博したのみならず、長い間實際に行つてみて、學校組織にも、その効果にも、兩方ながらに非常に役に立ちました。

私の擔當することになつた教授科目は算術、圖畫、自然地理及び獨逸語でありました。
私は主に中の級を教へました。

兄に與へた手紙の中で私は九歳から十一歳までの男兒が三四十人集つてゐる級を始めて教へた時の印象を語りました、私は未だ見たことはない、併し常に憧れてゐる常に缺乏を感じてゐる何物かを發見したやうな心持がしてゐました。丁度私の生が遂にその天賦の元行ホーテツエレメントを發見したやうなもので

した、私は魚が水を得た如く、鳥が空氣を得た如く幸福に感じました。

六十、家庭教師となる

けれども私が私の生のこの方面の進展を追求する前に、私は人として、教師として將又教育者としての私の品性を進化させる上に遅かに、重要であつた他の方面に觸れねばなりません、而してそれは事實直きにそれ自身の内に第一のものを吸引込んでしまひました。

その後間もなく私の舊友が——この人に會ふために私はフランクフルトに來たのです——私をグリューネルに紹介してくれました。友は一人で家庭教師としての彼の以前の職業に戻つてゐたのでした。その後彼は（フランクフルトの）某家での息子達のために家庭教師を探してゐるといふことを耳にしました、彼は直接その家族に私を紹介することが出來なかつたので手紙を以て紹介してくれました、而して私がイベルドンへ出掛ける數

週間前、彼は甚だ懇懃な辭令を以て、この家庭に私のことを書いてやりました。

教授と訓育とを要求されたのは、主に三人の息子に對してありました。

彼等は私に會ひに來ました、而して彼等の個的特性を聞いた後に、その結果として彼等のこれまでの教授、訓練が残りなく私に飲み込めました、而して私は彼等の當來の教育に就て相談しました。

扱て對象としての教育には私は眞實のところこれまで何の思考をもしたことはありませんでした、而してこの問題は私を大なる當惑の中に投げ込みました、それにも係らずそれは答を要求しました、而しておまけに正確な答を要求しました。

六十一、ベスタロツチに教うて

是等の少年の生活や事件の中に私は私の少年時代に似た點を屢々發見しました、それは私が注意してゐると直き記憶に上つて來ました。それ故私

は自身の生の發達及び教育的經驗に依つて、私に質された間に答へることが出来ました、而して痛切に感せられ、力強く現はされた私の答は、實際生活とは掛け離れたものでありますけれども、眞實の極印を帶びてゐました。

それは兩親の満足を買ひました、而して教育——これまで私には主觀的でばかりあつた發達——は、今や私には際立つて苦痛な變化である客觀的形式を取るに至りました。

私が教育の仕事を言語で現し得る形式にすることが出来るまでには、随分長くかかりました。

私は教育を知つてゐるのみでした、而して私は直接な個人的な接觸に依つて、教育することが出来るだけでありました。

私の天職と、私の生とが、今や私を呼んだ所の路に従つて、全力を盡して私はこれを修めました。

眞實のことを言へば私は家庭教師といふことには内心嫌氣がさしてゐるのでした。

私は不斷の故障と退引ならなくなつたこの仕事の片々な性質とを感じました、而してそこで私はそれは活力を缺いてはゐないかと疑ひました、けれども、私の蒙つてゐる恩寵と、殊に一人の少年の會釋する明かな、かいやかしい友情に充ちた眸とは、一日に二時間宛是等の子供に授業を與へ、而して散步を共にすることに私に決めさせてしまひました。

實際の教授は、算術と獨逸語とにある筈でした、算術の方は直きに手心が分りました、私は單にベスタロッチの課程に従つたに過ぎません、けれども獨逸語に對して私は大なる困難を感じました、私は當時否現今でも用ゐられてゐる正則な學校讀本を使つてそれを教へることから始めました。私は各の課業を出来るだけ心して教へました。

私は極く慎重な、又勤勉な態度を以て、知らないことは何でも研究しました。けれども是等の本の教授の仕方は私の努力を空しくしました。

私は私自身を進めるとも出来ませんでしたし、又私の生徒を進めることも出来ませんでした。

乃で私はベスタロツチの「母親讀本」を試みに採用することにしました。斯くて私達は餘程工合よく行くやうになりました、けれども、尚私は満足しませんでした。實際私は長い間、獨逸に於ける教育組織には、感心出来なかつたといふことを、申したいと思ひます。

六十二、幸福なる生活

算術ではベスタロツチの小本の「諸單位表」を用ゐて私は瑞西で見たと同じ結果に到達いたしました。私の生徒は、屢々質問の言葉が終らぬ中に、もう答の用意をしてしまひました。然かも、

私は程なくこの教授法の缺點を發見しました、それに就て私は後に述べるつもりです。

私達が一緒に散歩に出た時は、私は児童の生活に入つて行き、彼等を善い方へ感化して行かうと、努力しました。

私は再び私の少年時代の生活を繰り返しましたけれども、もつと幸福に繰返しました、何故ならば、私にはその生活の特異な方面も、普遍な方面も、よく分つてゐたからであります。

私のすべての思考も、仕事も、今や人の修養及び教育といふ題目にのみ、向けられてゐました。この時代の私の生活は真摯に充ち、活動的發展に充ち、進取的修養に充ち、従つて幸福に充つるやうになつて來ました、而して模範學校に於ける私の生活は、私の生徒及び圖抜けて聰明な人々の集つてゐる優れた同僚のあつたために、甚だ向上的であり、且又、奮進的であります。

六十三、植物採集と地圖製作

街路から見た所では、さのみ廣いとも見えませんが、校舎の位置及び周圍は、ちょうどとした中庭と、廣い花園とがありましたので、生徒は全く自由に運動することが出来ました。而して中庭でも花園でも思ふまゝに遊ぶことが出来ました。

その結果として、教師は教へてゐる兒童達の性格

に親近する最上の機會を、これに依つて與へられました。而して教師はすべて一週間に一度づゝ生徒を散歩に連れて行くべしといふやうな規定が自ら教師の側に出来上つてしまひました。

各教師は自分で最上と思つた方法を執りました、或る教師は散歩の時間を或る一定の問題を研究しながら過すことになりました、或る教師は偶然提へ得た問題に就て生徒を導きました。

私は大抵私の生徒と植物採集をして歩きました、それから又地理の教師として私は是等の機会を以て生徒をして自身地球表面の諸部分の關係を闡明すべく思考させるやうにしました。

私は此文學の授業を斯くして得たる是等の知識に基いて行ひました、この知識を教授の緒として授業を始めたのであります。

フランクフルトの町は出發點でもあり又中心でもあつたのであります、此所から私は私達の觀察

を右に左に此方に彼方に進めて行きました。

私はメイン河をそのまま基線に取りました、又小山や遠い山々の線を用ひたこともあります、私は限界の四隅の方位をしつかりと定めて置きます、何事に於ても私は自然といふもの、導くまゝに従つて行きます、而して適當な平地か砂地を選んでその上に斯くして得たる材料を以て直接に觀察して、その場所の圖を縮尺に依つて作り出します。

私の描いた圖(地圖)が皆の心に充分理解され、又よく印銘された時、私達はそれを學校で水平に置かれた黒板の上に再び描いてみます、地圖は最初教師と生徒とによつて作られます、次ぎに各生徒はそれべく練習として自身に作らせられます。

私達のこの地圖は視力の達し得る水平線の弧線に似せて圓形の境界線を待つてゐました。

學校の第二回公開審査に於て私はこの最初の企圖が不完全に充ちてゐたにも係らず出席の父兄か

ら非常な賞讃を贏ち得ました、而してそればかりでなく私の上官にも特別に稱揚されました。

すべての人は「それが眞實の地文學の授業の仕方である、児童は先づ野原へ行く前に自分の家に就てすべてを知らなくてはならぬ」と云ひました。

私の児童は町の周圍のことと家庭に於ける自分の室と同じ程度に詳しく知つて居りました。而して近隣のあらゆる自然的特徴に關して速かな又要を得た答を與へます。この遣方が私が後年完成した教授法の泉源でありました、私の教授法は今まで長年月の間用ゐられて來てゐます。

算術では私は下の級は教へませんでした、私は中の級を教へました。而して此所でも亦私の授業は喜ばしい讃辭を受けました。

圖畫でも亦私は中の級を教へました、この科の私の授業法は簡単な形狀から複雑な結合に進み、概略平面と立體を理解させ表現させることでありました。

私は成績調査の人々に充分満足を與へるやうな好成績を得たことを喜ぶのみならず、私の生徒が愉快に熱心に個性を失はずに勉強してゐることを見てよろこびました。

私は女子部に於て初學級の一組に正字法を教へることになつてゐました、この課業は普通この一科だけで他の科と合さつてゐることはありませんでしたが、私は正音法レヒトシユライバンと一緒にして授業しました。

授業は多分不完全でしたらう、けれどもそれは教師にも生徒にも明かに興味を與へました、而してその結果は甚だ氣に入りました。

女子部の他の級に於て私は豫備描法を教へました、私た唯線を結合させることのみを生徒に課して居りました。けれどもこの方法は論理的に必要な連結に於て缺くる所がありました。それ故それ私は私の意に充ちませんでした。この授業の結果が調査されたか何うだかは今思ひ出せません。

フレーベル會規則 (抄)

(抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保

育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノ

ハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達セんガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會 每年十月之ヲ開キ保育ニ開スル演説、談話、保育參考品

幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會 每年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ開スル演

說、談話、協議、實驗等ヲナス

尙毎年四月廿一日特ニフレーベル紀念ノ爲メ會ヲ開ク

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組

織ス
但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々長

中川謙二郎

本會幹事 (イロハ順)

井村くに 池田トヨ 芳賀晴

和田くら

倉橋惣三

小向きみ

和田實

岡部やす

福田ふくで

坂井ミツ

和田安井

坂井哲

野口幽香

伊澤脩二氏

波多野貞之助氏

戸野周次郎氏

尾田信忠氏

唐澤光德氏

棚橋源太郎氏

中島力造氏

野上俊夫氏

松本游氏

富士川游氏

雀部顯宜氏

篠田利英氏

秀三郎氏

菅原教造氏

本會評議員 (イロハ順)

本會評議員 (イロハ順)

田中ふさ氏

藤井利譽氏

吉田熊次氏

横山榮次氏

日田權一氏

岩谷英太郎氏

細川潤次郎氏

大瀬甚太郎氏

大久保介壽氏

谷本富氏

多田房之輔氏

中村五六氏

黒田定治氏

松本孝次郎氏

小西信八氏

櫻井光華氏

東基吉氏

瀬川昌耆氏

坂井綱枝

雨森鉄

下田次郎氏

乙竹岩造氏

野口幽香氏

下田權一氏

吉田熊次氏

横山榮次氏

日田權一氏

岩谷季雄氏

細川潤次郎氏

大瀬甚太郎氏

大久保介壽氏

谷本富氏

多田房之輔氏

中村五六氏

黒田定治氏

松本孝次郎氏

小西信八氏

櫻井光華氏

東基吉氏

瀬川昌耆氏

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)
婦人と子ども 第十四卷第八號 大正三年八月五日發行

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場